

自然災害への一つのアプローチ - 地球・人間圏学の視点から -

An approach to natural hazards from the viewpoint of geosphere-humanosphere study

田村 俊和 [1]

Toshikazu Tamura[1]

[1] 立正大・地球環境

[1] Geo-environmental Science, Risscho Univ.

[研究およびアウトリーチのテーマとしての自然災害]

自然災害は、日常気づきにくい地球環境あるいはその変動と人間生活との関係を改めて認識する重要な機会であり、また国際地球惑星年 (IYPE) のサイエンス・プログラムにも取り上げられているなど、地球惑星科学の研究を社会から見えやすくするにもきわめてふさわしい課題である。しかし、このテーマに地球惑星科学から接近するには、あらかじめ考えておかななくてはならない、方法あるいは姿勢の上の問題があり、それを克服することで、「地球・人間圏学」の立場も一層明確になることが期待される。

[自然災害に関わる地球惑星諸科学の基礎研究 - 地球プロセス論の意義と限界 -]

自然災害の発端となる現象は、いずれも地球のふつうの営みであり、さまざまな時間的・空間的頻度、強度で、しばしば顕著な空間的偏りをもって発現する。その発現過程は、それぞれ地球惑星科学諸分野の基本的研究対象なので、現象への関心に従い各分野でどんどん研究が進められ、知見が蓄積されてきている。現象解明の研究を推進する動機には当然災害の軽減・抑止があり、各研究者もそれに貢献する意欲をもっているが、仮にすぐ貢献できなくても、それぞれの分野での基礎研究は、地球に関する理解を深めるために、大いに進める意義がある。しかし、発端となる地球科学的現象のプロセスが解明されただけでは災害は軽減・抑止されないことも事実である。

[基礎的知見を災害防止・軽減に生かす方策とその近年の変容 - 防災インフラ論の限界の認識 -]

地球科学的知見と防災・減災をつなぐリンクはいくつかあるが、近代化社会、とくに過密な都市化地域とその周辺では、各種の人工構造物による防災という考え方が中心になってきた。日本はそのかなり極端な例と言えるが、そこにおいてさえ、近年は施設だけに頼る防災からの転換が図られつつあり、関連する法規が大きく改正されたり新たに制定されたりしている。「ハード一辺倒からソフト面の重視へ」という掛け声の下で、「危険情報の開示」が以前より積極的に行われ、「公助・共助・自助」の連携・分担が唱えられ、防災施設整備の「適正水準」が議論されるようになってきた。これは、住民の知識・意識や行動を日ごろから防災や減災に向ける点で効果的であるが、国家の財政負担軽減という下心も見え隠れしている。

[自然災害をめぐる人間行動論と、そこで見落とされている側面]

一方で、被害主体である人間への注目も高まってきている。住民の危険察知・避難行動、被災者救出、災害弱者対策、災害後の援助や「心のケア」まで、防災対策の一環として語られるようになった。しかし、これら一見人間重視の議論の中には、「なぜ、その時そこにおいて被災しなければならなかったか」「そこがどのようなところか、知っていてそこにいたのか」という視点が欠落しているようにも見える。自然災害の軽減・抑止には、関連するプロセスの研究に裏づけられた適切な「場の管理」による方法が、もっと追求されてよい。

[統合的自然災害論への展望 - 地球・人間圏学的アプローチの確立をめざして -]

地球惑星科学委員会地球・人間圏分科会に結集した会員・連携会員がカバーする広い分野では、それぞれ、発端となる地球科学的現象の発現から、主体である人間の被災まで、あるいは災害後の復興過程までの、多くのプロセスの解明が進んでいる。その個別の結論を単に列挙するのではなく、問題意識を共有した上で、各分野で解明された広い範囲の成果をもとに、そこに至る思考過程を互いに理解して議論すれば、単なる地球プロセス論や、単なる防災インフラ論や、単なる人間行動論に矮小化されずに、多くのプロセスが連鎖する自然災害の具体像をより明らかにして、地球に生きる人間が自然災害と賢明につきあう方法を示唆するものが得られるであろう。そしてそれを、地球上の各地域の特性に応じて、多様な自然災害対応策の具体的提言にまとめることも、大いに期待できる。さらに、そのように統合的に論じる経験を通して、地球プロセスから人間の認識・行動までを通して対象とする、地球・人間圏学の立場の(再)認識が進むのではなからうか。